

まい。むしろ、社会に適応できない人格だと知られたほうが良いとされるかもしれない。文学はあくまで個人の「思念」から始まるが、映画監督はシナリオ作成の間は小説家や詩人と似た自由はあるが、映画を撮影するという団体活動、社会的行為から逃れることはできないのである。

『乾いた花』は完成後、一年近くオクラ入りした。それ

なぜ、女優BBは、 小説『軽蔑』を愛したのか？

高野てるみ

この夏に、フランスの大女優ブリジット・バルドーの言葉集を上梓した。

その作業の中で偉大なイタリアの文豪モラビアと、その作品『軽蔑』に触れることができたのもバルドーあつてのことだった。

彼女は、一〇代の若さで、彗星のごとく現れ、一九六〇年代を牽引した映画界の大スター。常にスキャンダラスな話題を提供し、愛称BB(ベベ)の名前は世界に轟いた。マリリン・モンローと並んでセックス・シンボルとして注目され、男性からの人気は絶大で憧れの的であった。「全女性の敵」とまで言われるほど彼女の美しさや肉体が男たちを惑わせ、恋人をいつ捕られるかわからないとまで賞賛されたものだ。映画さながらの私生活では結婚・離婚を繰り返し、恋愛を極めた。その生き方が自由奔放過ぎて、羨望を集めるも、攻撃的にもなっていた。

ところが、そんな「小悪魔」的生き方や着こなしが、ファッション・アイコンとして、今の女子たちの憧れだとい

ダーを自覚した20世紀とつながっているというメッセージだと受け取った。

俳句・短歌に始まり、現代小説、人形浄瑠璃を問わず、多彩な日本語の文体と向かい合って映画を作った。一九六〇年代は安保闘争や冷戦という政治の季節といわれるが、私には本格的に文学と対話しつづけた日々であった。

う。三〇代を迎えたバルドーは、七〇年代の早いうちにさっさと映画界から引退、それから四〇年近くを経ているのだから、これは、ちょっととした驚きだ。モンローとは、今やその存在の意味が、大きく違ってきたようだ。モンローは、過去形、バルドーは明らかに現在進行形で伝説的女優の地位を獲得しているのである。恐るべしは、BB。

多くの監督の作品に主演したバルドーだが、ジャン・リュック・ゴダール監督の『軽蔑』は、『勝手にしやがれ』でバルドー同様、彗星のごとく躍り出た彼が、三年あまりの後に手がける。ヌーヴェル・ヴァーグの旗手と、フランスを代表する大物女優の組み合わせは、それだけでも注目に値する。オリジナル脚本ではなく、モラヴィアの原作を使い、彼自身のミュージズ、アンナ・カリーナを登場させないことも、彼らしからぬ企画であった。

バルドー曰く、ヌーヴェル・ヴァーグにとって自分などは、すでに「古典的女優」であり、不適応ではないのか、また、辛辣にもゴダールのことを、「左翼があった貧乏な芸術家」と位置づけたものだ。しかし、いつもながらの、ポジティブなチャレンジ精神と、何より『軽蔑』の原作の愛読者であったことで、主演を承諾。結果的に映画は大ヒットする。

しかし、バルドーは、良く分らない作品だと手厳しい